御船町恐竜博物館の
継続的学習・探究活動支援への取り組み

御船町恐竜博物館　学芸員　富澤 由規子

主任学芸員　池上 直樹

1．はじめに

御船町恐竜博物館では、幼児から大人までを対象として、年間 50 回を超える講座や体験学習の機会（イベント）を提供している。これらのイベントの参加者にはリピーターも多く、継続的な学習機会に対する潜在的なニーズが伺える。

一方、これからの博物館は、従来の活動をとおして、多様な地域の主体と連携し、地域活力の向上や社会的課題の解決に寄与していかなければならず、そのためには、連携（つながる）が重要な手法となる。連携の基盤は、人と人とが「つながる」こと、すなわちコミュニティの形成であり、博物館の教育や学習支援の取り組みは、コミュニティ形成にも重要な役割を果たしている。

本発表では、当館の教育活動と継続的な学習支援の取り組みについて紹介する。

2．御船町恐竜博物館の教育活動

1）パレオプログラム

岩石・鉱物、地層、化石などを教材とした学習プログラムで、毎月 1 回、第 3 または第 4 日曜日に開催している。対象は小学 1 年生以上としているが、必要に応じて小学 3 年生以上とする場合もある。化石の形態からその持ち主を推測する「化石探偵」や、ティラノサウルスについてじっくり考える「ティラノサウルス徹底調査」など、標本を観察したり他者の考えに触れ合ったりすることで、参加者自らが体験したり考えたりする内容が軸となっている（図 1）。

図 1　パレオプログラム

このように、パレオプログラムの目的は標本の観察や他者との関わりを持つ過程で、新しい気づきや考えを得る楽しさを体感することにある。さまざまな博物館に展示されている標

本や、テレビ、図鑑などで化石を目にしたときに、このパレオプログラムでの体験をきっかけとして参加者自らが学びを広げることを目標としている。

2）わくわく体験教室

図２　わくわく体験教室

地質や化石を題材としたものづくりイベントで、毎月第２・第４土曜日に開催している。対象年齢は設けておらず、未就学児から楽しめるイベントである。化石のレプリカ作成用の型に紙粘土を詰めて作る「紙粘土でアンモナイトづくり」や、塗り絵をした紙から作成する「恐竜缶バッジづくり」など､気軽に楽しめる内容としている（図２)。

コロナ禍以前は、予約不要で教室に訪れた人から順次ものづくりを開始するスタイルをとっていたが、2020 年度より開始・終了時間を設定したセクション制とし、ものづくりを開始する前に古生物や地質に関する 10 分程度の短い講話を提供するよう変更した。参加できる人数が減少するというデメリットがあるが、ものづくり体験前の講話が好評であり、リピーター獲得の一助となっていると感じている。

3）ジオスクール

図３　ジオスクール

野外での活動が中心の学習プログラムで、山の中の広場で化石採集を楽しむ「化石教室」や、学芸員と歩きながら現地の地質や化石について学ぶことができる「ジオハイク」などを提供している（図 3)。実際に現地で観察や化石採集をすることは、参加者の記憶に強く刻まれると考えられ、イベント終了後に各自の身近な地域の地質へも興味を持つことで、学びの広がりが期待される。

4）ポイントカード

学びの継続を促進するためのツールとして、学習プログラムとものづくりイベントのそれぞれについて、ポイントカードを導入している（図 4)。

学習プログラムの参加者を対象とした「化石はかせ認定プログラム」では、イベントに参加すると単位（ポイント）を得られ､1 年間に獲得した単位数に応じて “ 化石バチェラー ”“ 化石マスター ”“ 化石ドクター ” の称号を獲得できる制度である。年に 1 度開催する化石はかせ認定プログラム認定証授与式では称号の認定証と記念品を贈呈し、 1 年間の継続的な学びの振り返りを行なっている。わくわく体験教室が対象のポイントカードも同様に、イベントに参加するとポイントがもらえるシステムである。こちらは、ポイントが貯まるとその場でオ

リジナルシールや記念品が贈呈されるため、初めて手にするポイントカードとしてもわかりやすい仕組みとしている。

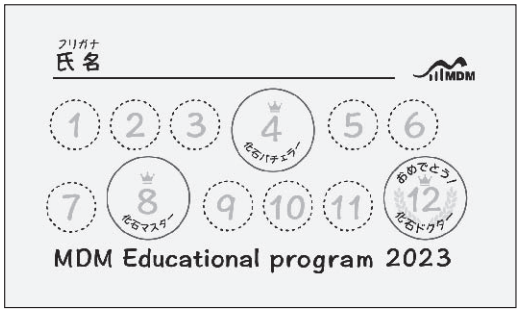


図４　学習プログラム用のポイントカード
（化石はかせ認定プログラム）

５）アウトリーチ活動

出張展示や、外部組織が主催する学習イベントに対して当館の教育プログラムの提供や講師の派遣を行なっている。当館を訪れたことがない参加者も多く見受けられるとともに、そのイベントを契機として当館を訪れる人もおり、博物館での学びを始めるための良い足がかりとなっていると感じている。

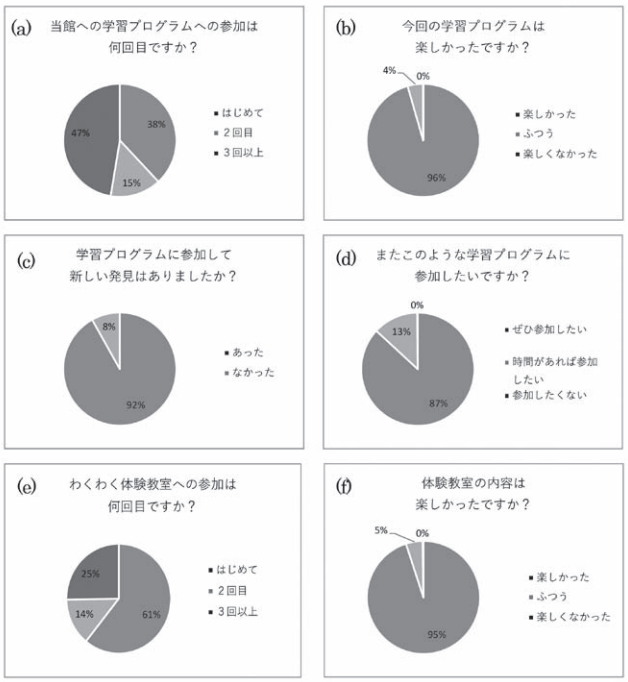
コロナ禍以降はICTを活用したアウトリーチ活動も増加した。千葉県から当館の貸出化石を利用したオンライン講座の依頼を受けたり、当館の配信する動画の視聴をきっかけとして東京都から来館したりと、遠方へのアウトリーチ活動にICTの活用が有効であることを実感している。

６）アンケート結果に基づく教育活動の効果と分析

当館がリニューアルオープンした2016年度（平成28年度）から2022年度（令和4年度）までに収集したアンケートについて分析を行った。年度によって異なる設問は除外し、同一の設問かつ、継続的学習と探究活動支援に関連する設問を抽出し、その回答を集計した。なおアンケートの実施方法は、2016年度から2019年度まではイベント実施終了直後に紙面により回答いただき、2020年度以降は、googleフォームを利用したインターネット上でのアンケート集計に変更した。インターネットでのアンケート収集に伴い、イベント参加後における参加者の行動変容について問う設問を追加した。総回答数は、学習プログラム（パレオプログラム／ジオスクール等）は計549件、わくわく体験教室は2,698件であった。集計結果を図5に示す。

分析の結果、学習プログラムは6割以上がリピーターであった。“学習プログラムにまた参加したいか”という問い（図5(d)）に対しては9割近くがぜひ参加したいと回答していることからも、継続的な学習への契機となっていることが窺える。わくわく体験教室については、事前予約制を導入前後でリピーター率に変化がみられた。予約制を導入していない時期はリピーターが約4割であったのに対し、予約制導入後にはおよそ5割に増加した。2.2) に

記載した短い講話の提供による効果、あるいは、事前に予約をすることでイベントに参加するまでの高揚感や家庭内における会話の増加によって、学びのモチベーションが上がったことがリピーターの増加、すなわち継続的学習につながったのではないかと考えている。



(g) イベント参加後の行動変容に関する回答

[学習プログラム]
- スーパーで貝を見た時、化石の貝と似てるかどうか興味を持って観察していた（大人 40 代）
- 家庭でテレビ視聴中などに恐竜のことが紹介されると関連する説明をしてくれた（大人 40 代）
- 化石ひろばの帰りに博物館にも寄ったのですが、今までは素通りしていたような展示の前(ガーの展示など)で足を止めて　観察していました。(大人 40 代)
- 発掘体験をしたあと、恐竜博物館に行ったら展示してある化石の有り難みが分かった(小 6)

[わくわく体験教室]
- 帰ってから図鑑をみて話をしました。(大人 30 代)
- 先生に教えてもらった、アパトサウルスの名前がブロントサウルスの名前に変わったこと、プテラノドンの名前の意味などを、帰宅後父親に話していました。(大人 30 代)
- ステゴサウルスとティラノサウルスが顔を合わせることがなかったと聞いて、「ティラノサウルスとステゴサウルスは戦わなかったんだね」と絵本を見ながら復習していました。(大人 30 代)
- 体験後、館内を観ていたら、説明があった恐竜をじっくり観ていた。(大人 40 代)

図５　アンケート集計結果
(a)-(d)：学習プログラム、(e)-(f)：わくわく体験教室、(g)：参加後の行動変容について。

３．自発的・継続的学習をサポートする取り組み

１）ジュニアキュレーター養成講座

2017 年から取り組んでいるこの講座は、感染症の流行で中断を余儀なくされた時期を経て、8 年目を迎えようとしている。博物館のいろいろな作業に参加しながら、化石や地質について学ぶことができる講座であり、年 6 回の講座への参加を経て、「ジュニアキュレーター」の称号が授与される。ジュニアキュレーターは、高校卒業まで在籍することができ、毎年募集によって参加する講座生とともに活動に参加する。毎回 10 名程度の参加がある。

図６　ジュニアキュレーター養成講座

活動の内容は、資料の整理や化石のレプリカ作製作業の補助など、館内での仕事や野外踏査への参加、他館の見学や講演会への参加等を計画

して実施している。館外での活動など、内容によっては、保護者の参加も歓迎しており、部活動的な活動となっている（図 6）。中高生は、自主的に地学オリンピックに挑戦する生徒や研究に取り組む生徒もおり、個別にサポートを行っている。

2）プリパレーター養成講座

大型化石の収集を行う博物館では、標本化作業（化石のプレパレーション）に膨大な時間と労力を要する。この作業は、多様な業務を抱える学芸員が片手間でできる作業ではなく、欧米の博物館ではプリパレーター（技師）が配置されている。

当館では、地域の白亜紀層の恐竜化石等を収集しており、露頭から採取してきた化石のプレパレーションに継続して取り組んでいる。この作業は、忍耐力と集中力を要する作業であるだけでなく、一定の知識と技術を必要とする作業であるものの、この作業だけを専門的に学ぶことができる機関はなく、博物館が育成しなければならない。

そこで、当館でもこのような人材の育成を目指して、この講座を開講している。年 6 回の通年の講座を受講し、プリパレーターとしての基礎を身につけた後に実習を行い、大型化石を適切に取り扱うことができる人材を育て、博物館の資料の収集・保存活動への参加者を増やすことをねらう。

3）学習パスポート

この取り組みは、学校教育の一環で来館した子どもたちに、当該年度に何度でも再来館できる観覧券「学習パスポート」を配付するものである。授業での来館は、滞在時間が限られ、必ずしも自らの興味・関心に従った見学の時間が確保できていないため、家族と一緒に再度来ていただくことをねらいとしている。

4）リサーチアソシエイト

当館では、協力研究員（リサーチアソシエイト）を受け入れている。研究機関に所属する人材だけでなく、機関に属さない研究者を受け入れることができるようにしている。協力研究員は無給だが、学芸員と共同で実験室や機材の使用が可能である。生涯学習の延長線上に在野の研究者の存在があり、その活動をエンカレッジする取り組みである。

4．地域課題とコミュニティ形成

1）これからの博物館と地域課題解決への寄与

国際的な動向の中において、博物館には「文化の結節点」として「文化をつなぐミュージアム (Museum as Cultural Hub)」としての役割が期待されている。文化審議会博物館部会法制度の在り方に関するワーキンググループ（2021）では、この役割が「つなぐ」をキーワー

ドに整理されており、地域の人々や世代をつなぐ交流だけでなく、文化・分野・地域課題・自然環境・知識・情報をつなぐことが整理されている。

博物館に求められる役割の共有は重要な課題である。公立博物館の場合、配置される行政職員は、通常、庁内の移動によって配属されるため、初めて博物館の役割や活動にふれる職員も少なくない。館長と学芸員だけでなく、職員全体で博物館の理念や活動の方向性を共有し、設置者や住民との共有も重要となる。

本町では秘書政策室が庁内事業の調整をおこなっており、改正博物館法の施行を契機として、博物館事業の調整にも入ることとなった。現在、特別展の開催に合わせて地元の商工会や観光協会との連携を図ることを首長部局の担当課と調整し、地域活力の向上に寄与する取り組みの展開が図られている。また、図書館と連携したオンライン講座の実施や公民館等が実施する生涯学習支援講座への関与等の庁内連携も行われている。このような庁内での協働は、博物館の理念・役割への理解を広げ、新たな地域課題解決の機会を生む。

2）博物館の活動とコミュニティ形成

コミュニティの形成において、人々との対話や関係構築は大変重要な要素である。博物館の活動において、最も利用者と対話ができる機会は、教育普及活動であり、当館でもパレオプログラムなどのワークショップへの参加者は、６割以上がリピーターである。このような環境から博物館職員と利用者との対話が生まれ、継続的な学習を支援し、中には、自由研究などの自発的･継続的な学習を指向する子どもたちも生まれる。当館のジュニアキュレーター（小学校高学年～高校生）やプリパレーター養成講座（大人）は、このような自発的な生涯学習活動を支える取り組みであり、少人数ではあるものの、継続的な活動からコミュニティ形成につながることが期待できる。

一方、地域の多様な主体との連携・協働の構築については、目的をもって活動しているコミュニティや機関と双方のメリットを共有し、双方に有利となる事業の構築を図ることが大切である。直接連携することが難しい場合には、設置者の担当部局との協働によって異分野への参加を試みることもできるかもしれない。

このような連携から生まれるコミュニティーを束ねる会員制度や、イベントやファンドレイジングの展開など、多様なつながりを構築し、それらを「見える化」する取り組みがこれからの博物館には必要であると考えられる。その中で、日々の教育普及活動は、博物館を利用する人々とのつながりを構築する基盤的な活動として大変重要である。

文献

文化審議会博物館部会法制度の在り方に関するワーキンググループ（2021）博物館法制度の今後の在り方について（審議のまとめ）。